空谷明応所用袈裟

京都　慈済院蔵

丈　最大　一三六・〇糎
　　最小　九八・六糎
幅　三三六・〇糎
〔原色図版4〕

嵯峨天龍寺塔頭、慈済院に伝えられたこの袈裟（附属―坐具）は同院を塔所とする空谷明応の法衣として秘伝された。そのあらましは、同寺塔頭、三秀院伝来の金襴九条袈裟とともに、すでに紹介され[注1]、また名物裂との関連において、主として織物組織の面から記述された[注2]。ところで、昭和五十六年秋、京都国立博物館の特別展覧会「禅の美術」にこの袈裟が出陳され、改めて調査の機会を得たのでいささか私見を添えて報告することとした。

一

この袈裟は九条衣として重要文化財に指定[注3]されたが、実際は欠落があって完全ではなく、八条分が現存する。それでもなお禅衣特有の形制と大きさ（丈最大一三六・〇糎、最小九八・六糎。幅三三六・〇糎）をしめしている（図1）。用いられている裂はいずれも中国から舶載のものである。先ず紫綾を伸べて袈裟全体の基本部分とし、さらに二種の金襴を縁、竪条、横堤などに縫いのせている。その縫法は片撚糸を用いてきわめて大様に処理したもので、袈裟としては他に類例[注4]の少ないものといえよう。

田相部は基本となる紫綾がそのままあらわれているわけで、袈裟の表裏にあわせてこの綾も表裏を用い分けている。ところでこの綾はかつて無地と考えられたこともあったが、実際はきわめてわずかの部分であるが、雲竹麒麟文様（図5・6）があらわされている。表側では右から第六番の第一田相のみに見られ、裏側（図3）では表側で見た同文様の裏面が表面よりもいま少し多く出ている。さらに左右の縁裂の裏と右から第三番の竪条最上部にやはり裏文様がみとめられる。

糸は丸味のある上質のもので、経・地緯ともに紫でZ撚り。組織は経三枚綾地、Z流れ（図2）、文様部分は紫の絵緯を全越（まるごし）として繡取りに用い、表面から見て緯六枚綾に地搦みで押えている[注5]。なお地緯・絵緯ともに引きそろえで、特に絵緯は二本の引きそろえがきわだっている。密度は地の部分で一糎の間に経が約六〇本、緯は約二二・五越、ハツリは三本である。文様の裏は絵緯を遊ばせて、糸を浮かせたままである。全体にシケが見られるが、それは主として経糸の太細による褪色の差異によると考えられる。

縁・竪条・横堤は金襴で、大むねは名物裂の世界で富田金襴としてしたしまれている蘇芳地連雲雑宝文様金襴（原色図版4）を用いる。経緯ともに蘇芳染で、丸味のあるZ撚りの糸を用いるが、経には極端な太細があり、緯は二本の引きそろえである。金糸は平金糸で幅に広狭が見られ、比較的薄い箔の接着剤には赤味は感じられない。いわば青金の風合いをしめす。

地組織は経三枚綾、Z流れ（図4）、金糸は全越で緯六枚綾、Z流れで地搦みに押える。ハツリは三本。密度は一種の間に経約六〇本緯約二〇越。文丈は九・八糎、窠間幅四・九糎。

竪条には、右から第二・四・五番に別の金襴が用いられている。

金茶地雲鳳文様金襴（図8）で小文様の詰った趣が特色である。経緯ともに金茶色を呈し、丸味のあるZ撚りの糸を用いる。経は太細が目立ち、緯は引きそろえ。金糸は平金糸で、箔の接着剤は赤。

地組織は経三枚綾でZ流れ（図7）、金糸は全越に織り込まれ、緯六枚綾、Z流れで地搦みに押えている。ハツリは三本。密度は一糎の間に経約五〇本、緯約一九越。文丈は九・九糎、窠間幅五・二糎。この金襴は緯の打込みが比較的ゆるやかであり、その上、金糸は平均に幅狭く、粗く透けた感じが特色といえよう。

なお裏側には環珮（図10）がつけられている。直径九・七糎、幅二・三糎。薄い銅板を鎚起で中空に仕上げ、蓮唐草をあらわし鍍銀をほどこしたものである。

附属の座具（丈一一七・八糎　幅八六・一糎）（図9）は、袈裟と同様の比較的粗い仕立方で、三幅はぎ合せの麻地を基本に、縁や四天をのせたもので八折とする。麻地は経にわずかのS撚りがみとめられ、緯は引きそろえで太い。平組織で密度は一糎の間に経約二五本、緯約二三越。

縁は現状金茶色をしめす金襴。おそらく紅染で当初は美しい紅色を呈していたと考えられる。文様は牡丹唐草であるが、通例の細い蔓で花・葉をつなぐ形式とは異なり、花と葉で連続文様を構成する特色のあるもの。経緯ともに同色で前記のようにほんのりと紅色を感じさせる。経は特に丸味のある見事な糸でZ撚り、太細が見られる。緯は引きそろえ。金糸は平金糸で広狭があり、赤色の接着剤で金箔を貼る。

地組織は、経三枚綾、地Z流れとし（図11）、金糸は全越、緯六枚綾で地搦みに押える。ハツリは三本。密度は一糎の間に経約五三本。緯約一六越。

四天は紺地牡丹唐草文様金襴。経は紺でわずかにS撚りがかかる。緯は茶で引きそろえ。金糸は平金糸、金箔を貼る接着剤は白色。地組織は経三枚綾地、Z流れ（図12）で、金糸は全越しとし別搦みで押える。搦み糸は細い赤糸で、地経二本に一本の割で加わり、緯三枚綾Z流れで搦む。ハツリは三本。密度は一糎の間に経約七五本、緯約一七越。

ここでは二種の金襴が見られるが、縁はその文様、経緯糸、金糸、風合いのいずれにおいても、袈裟に用いられている各裂とほぼ同時期のものといえよう。しかし四天は古式の文様をよく写しているとはいえ、縁金襴とはなはだしい相異をしめし、おそらく江戸時代の成織と考えられる。

以上がこの袈裟及び附属する座具のあらましであるが、冒頭にも記したように、この法衣は空谷明応の料であると伝承し、また同人の活躍期から用いられている裂類の作期がほぼうかがえると考えられる。そこで空谷明応の事蹟を簡単にうかがうこととしよう。

二

空谷明応[注6]は江州浅井郡の人、嘉暦三年（一三二八）六月二十四日誕生。九歳の時同郡の宏済寺の志徹に入門する。聡敏な天性の資質に加えて学問によく精進した。師の志徹は空谷の器の偉なるを悟り、入洛させて夢窓の上足、無極志玄に学ばせる。さらに夢窓に侍しその後、東陵永璵の会下で知賓となり、建仁寺の放牛光林のもとで典司をつとめる。また碧潭周皎・黙庵霊淵・中厳円月等三大老について三蔵教巻や五家禅灯・九流百氏の書をきわめたが、そのことによ

って南禅寺の蒙山智明に招かれて箋翰を掌した。永和元年（一三七五）冬、美濃の天福寺を開き、天寧寺・大光明寺などを管した。明徳元年（一三九〇）足利義満は金襕袈裟を奉じて、嘉慶の初（一三八七頃）から退休していたのを招して再び僧録につかせる。また後亀山帝に法を説き仏日常光国師の号を賜り、明徳三年には相国新寺を修し落成供養会をとり行なう。応永初年（一三九四頃）相国寺焼失にあたって、また住侶となり二年の間に諸堂を一新させた。このように目ざましい業績を残こして応永十四年（一四〇七）正月十六日、将軍をはじめ多くの人に惜しまれながら示寂した。寿八十。天龍寺慈済院に塔した。

このように空谷明応は主として十四世紀後半に活躍したが、その間、明徳元年に義満が金襕僧袈裟を奉じたとあるのに注目され、あるいはこの伝衣がその記述の袈裟にあたるのではないかなど想像される。この袈裟に用いられた特色ある裂類の風格から、その可能性は十分認められるがそれはとにかくとして、明応の生没や事蹟によって、ほぼ元末明初の裂を用いたものと知られる。

三

この袈裟に用いられている裂は、その作期をほぼ明らかにすることで貴重であるが、さらに田相の紫地雲竹麒麟文様綾は、特色のある組織に加えて、その類例を見ない文様の魅力にひかれる。また縁と竪条・横堤の蘇芳地連雲雑宝文様金襕は先述のように名物裂の富田金襕との関連において考えられるもので、いずれもそれぞれに興味深い内容をひそめている。ここではそうした点に留意して、いま少し詳細に述べることとする。

紫地雲竹麒麟文様綾

この裂は当初から袈裟の料として織られたのではないようである。例えば表側にただ一ケ所（右から六番目の田相部）見られる文様でも、その約三分の一が横提に覆われて縫い込まれている。また文様の幅はこの田相の幅にほぼ等しく（約一七糎）、あたかも寸法を合わせたように見られるが、しかし実際は別の部分がはぎ合わされて文様が完成するのである（図6）。すなわちこの雲竹麒麟文様は縦約三三・四糎、横約二八・〇糎の単位文様で、主文は麒麟。たてがみを逆立て、眼光鋭く虚空をのぞみ、髭をふるわせた一角の頭部。たくましい胸には小円の斑文があり、大地を踏しめる前足には、霊力をあらわす火炎がからむ。太い巻毛が特徴の尾を立てたまことに堂々とした形姿である。上方には瑞雲や気がたなびき、竹のような葉の樹木が枝をのばす。下方は土坡をあらわして岩に竹や霊芝ようの植物を配している。

麒麟は瑞獣[注7]で、その意匠はまた吉祥の意味をあらわすのであるが龍や鳳凰ほどに多くの例は見られない。特にこの綾では染織にあらわされた例として注目されなければならない。染織意匠ではないが管見に入った他の例に比較すると、またこの麒麟ははなはだ特色のあるものと気づく。例えば十四世紀から十五世紀にかけての中国青花[注8]の意匠に、いくつかを見出す麒麟はその出自を鹿と考える[注9]にふさわしく、鹿角風の一角がある頭部、横長の胴部、敏捷さをうかがわせる細っそりとした四肢、二つに割れた蹄などをしめすが、これは一角をいただくのを除くとそれらの例とは異なる点が多い。先ず四肢は敏捷さをうかがわせるよりもむしろ重重しい力感を見せる（図6）。胴もまた短かく丸さを感じさせる。尾は細長く先端に巻毛が

あらわされている。また青花の図では鱗状に表現された体文はこれでは小円とされている。以上のような特色は、むしろ獅子に近い表現であるといえないだろうか。

ところで麒麟の立体的な作例は六朝時代の帝墓において、墓道の左右に置かれた石獣[注10]中に見ることができる。それらは一角を戴くが鹿的要素は片麟も見せない形式で、むしろ獅子や中には龍に近いといえるものがある。しかしすでに漢時代には鹿のように見える例が紹介されている[注11]ので、この想像上の霊獣は、その造形にあたって各種のものから示唆を得たと考えられるのである。やがて十四・五世紀には鹿的表現に定まったのであろう。この袈裟の場合は当時の一般的な表現と異なるわけで、なお好例を得てその意味を明らかにしたいものである。

蘇芳地連雲雑宝文様金襴

すでに指摘されている[注12]ように、この金襴は、名物裂の富田金襴と同一のものを考えられた。霊芝風の雲頭を、さらに斜めに流れる雲で繋ぎ、左上から右下への連続文様とする。地間には雑宝[注13]を散らしたものでまさしく富田金襴と同類の文様である。

しかし両者に異なる点があることは、すでに述べた[注14]ところであるが、いま一度注目したい。

糸質―袈裟は丸味のある見事な光沢をそなえるが、富田金襴は同様に丸味をしめすがむしろ光沢に乏しく、あるいは粗野ともいえる古格をうかがわせる。

組織―いずれも三枚綾地であるが綾の流れは地搦みの流れとともに異なり、袈裟はZ流れ、富田金襴はS流れである。

文様―袈裟の雲文様は曲線のたわみが大きく、斜め方向の流れに停滞する感があるが、富田金襴は各形象に無駄がなく、よく整って流れもとどこおらない。雑宝は袈裟の方が正しい形をしめしている。

風合―袈裟は柔らかくしなやかであり、富田金襴は金襴特有の横方向への張りがある。

以上のように両金襴は異なる点を持ち、したがって二者をただちに同裂と考えることは出来ないわけである。何故異るのかが問題となるが、その間には本歌と写しとの関係が存在するのではないかと考え、一応、富田金襴に古格を認めたのである。[注15]

なお未解決の問題を残しつつ、空谷明応所用の伝法衣の調査から得たあらましを報告した。特に禅家には祖師の法衣が数多く秘伝されているが、それらの法衣の客観的な検討によって、伝承の所用者との関係を明らかにすることが出来れば、染織史研究の上で貴重な資料となるのである。

（切畑　健）

〈注〉

1　北村哲郎「伝法衣二肩」（『ミュージアム』211　東京国立博物館）

2　山辺知行監修『名物裂』（毎日新聞社　昭和五十三年）

3　『重要文化財』25工芸品Ⅱ（毎日新聞社）に「平・綾織金襴　連雲文様9条」とある。

4　例えば牡丹唐草文様印金袈裟（伝無準師範所用　京都国立博物館蔵）、二重蔓牡丹唐草文様金地金襴袈裟（仏照慈明所用　三秀院蔵）などはあたかもミシンによったかと思わせるほど細やかな針目で仕立てられている。

5　この文様部分を加えて考えると、この裂を単なる綾とはいえない。組織上からは唐織に近いが、絵緯を地搦みで押えているのに特色がある。

6　「常光国師行実」（『続群書類従』第九輯伝部）

「京兆天龍寺沙門明応伝」（『本朝高僧伝』巻第三十七）

7 出石誠彦「支那の古文献に現はるゝ麒麟について」（『支那神話伝説の研究』所収　中央公論社　昭和十八年）

8 『世界陶磁全集』13遼・金・元　73図（平凡社　昭和五十六年）

9 註7参照。

10 『六朝芸術』十九図他（文物出版社　一九八一年）

11 註7参照。

12 註1参照。

13 守田公夫『名物裂の成立』（奈良国立文化財研究所学報第二十冊）いわゆる宝尽しである。『吉祥図案解題』（野崎誠近　平凡社　昭和十五年）に八宝を挙げ、他の同類文様を雑宝とする。

14 『京都国立博物館蔵前田家伝来名物裂』上巻（京都国立博物館　昭和五十三年三月）

15 註14参照。

図１　蘇芳地連雲雑宝文様金襴袈裟（表）　　慈済院蔵

図２　紫地雲竹麒麟文様綾　　慈済院蔵　　拡大図(15/1倍)

図 3　蘇芳地連雲雑宝文様金襴袈裟（裏）　慈済院蔵

図 4　蘇芳地連雲雑宝文様金襴　慈済院蔵　拡大図（15/1倍）

図５　紫地雲竹麒麟文様綾（部分）　　慈済院蔵

図6　紫地雲竹麒麟文様綾（部分）　裏面　　慈済院蔵　　（図5の裏面）　　（図3の右端）

図７　金茶地雲鳳文様金襴　　慈済院蔵　　拡大図(15/1倍)

図８　金茶地雲鳳文様金襴　　慈済院蔵

図 9　坐具　　慈済院蔵

図10　蓮唐草文様環珮　　慈済院蔵

図11　紅地牡丹唐草文様金襴　　慈済院蔵　　拡大図(15/1倍)

図12　紺地牡丹唐草文様金襴　　慈済院蔵　　拡大図(15/1倍)